



全農教

日本帰化植物友の会通信



NO.5 [2005年10月23日 発行]

タカサゴユリか、シンテッポウユリか？

— 帰化植物メールよりの抜粋 —

編集部

この頃各地で見られるタカサゴユリ（「日本帰化植物写真図鑑」ではこの和名を採用した）。このタカサゴユリについて「タカサゴユリとシンテッポウユリの違いはどこか？」「現在各地に野生化しているのはタカサゴユリと呼ぶのはふさわしくなく、シンテッポウユリと呼ぶ方が適切である（神奈川県植物誌2001年、千葉県自然誌2003年ではシンテッポウユリとしている）」「タカサゴユリの花被外面は「紫褐色」とあるが、最近この花被外面が白色のものがあるが、これもタカサゴユリか？」など、帰化植物のメールに多数の情報や意見が寄せられ、議論が展開されております。

そこで今回は2005年8月26日から2005年9月13日までにメールを寄せられた皆様のご承諾を得て、この議論を抜粋して、友の会通信に転載しました。友の会会員のうち2/3の人はメールに参加されておきませんので、再録も十分に意義があるものと判断し、掲載いたしました。

（編集部）

皆様のご意見をお寄せください。お待ちしております。

[naturplant:2417] タカサゴユリについて

帰化植物MLの皆様、全農教の広田です。

先週中央自動車道を走ったらタカサゴユリが見事に咲いていました。4年前ぐらいまでは中央自動車道の双葉サービスエリアの法面にポツリ、ポツリと咲いていた程度だったが、今回走ったらこの双葉サービスエリアから韮崎インターまでの数kmにわたって道路両側の法面に見事にタカサゴユリが花を咲かせていました。タカサゴユリの種は軽くて風で広がるとは思っていたが、わずかに3～4年でこれ程広がるとは今更その繁殖力に驚きました。

広田伸七(2005. 8月26日)

[naturplant:2418] Re: タカサゴユリについて

速水@京都です。

私も2, 3年前から気にかかっておりました。最初みつけたのは琵琶湖の西側の湖周道路でした(比較的新しい道です)。昨日は大阪から中国道を経て播但連絡道で和田山まで行きましたが、あちこちで群生していました。

やはり成長(開花期まで)の早さが原因なのでしょう
速水 厚(2005. 8月26日)

[naturplant:2419] Re: タカサゴユリについて

愛媛県の小林です。

私が知人からタカサゴユリを教えてもらったのは今から10年近く前のことでした。場所は県の南部でまだ数はそれほど多くなかったように記憶しています。この数年の間に分布域が急速に広がったようで、山裾にある私の職場の周りでも法面のあちこちで開花しています。

また、今週のはじめに西瀬戸自動車道、山陽自動車道を通り下関まで走りましたが、タカサゴユリばかりが目につきました。タカサゴユリが見られないのは高架の上とトンネルの中だけといってもよいくらいでした。

小林真吾(2005. 8月26日)

[naturplant:2420] シンテッポウユリ

本多郁夫です。

タカサゴユリが話題になっていましたので、便乗させて下さい。石川県でも十数年前から殖えだして、特に最近は急激に増加しています。日本帰化植物写真図鑑(全国農村教育協会)には、タカサゴユリしか載っていないのですが、今年になって急に、タカサゴユリの特徴である花被外面の「紫褐色」のほかしが見られない純白のタカサゴユリが殖えてきております。

「日本の帰化植物」(平凡社)によると、テッポウユリとタカサゴユリとの間に雑種ができ、「シンテッポウユリ」(新鉄砲百合)と呼ばれるそうです。タカサゴユリによく似ているが、花は白色だとのこと。

本多郁夫(2005. 8月26日)

ので、日本には1924年(大正12年)に種子が導入され、切花用にさかんに栽培されたといえます。テッポウユリが春に開花するのに対し、タカサゴユリは日本では7～8月に開花するので、テッポウユリのない夏の切花として人気があったようです。実生が10ヶ月足らずで開花し、夏に開花するタカサゴユリの性質と、純白で大輪のテッポウユリの性質をあわせもったものを作成する目的で、両者の交配が試みられ、長野県の西村進氏が1939年頃に成功したそうです。その後、テッポウユリのさまざまな品種とタカサゴユリとの交配、交配種とタカサゴユリやテッポウユリとのもどし交雑などが繰り返され、たくさんの園芸品種が作出されました。これらの交配種を総称してシンテッポウユリといえます。実生から短期間に開花することと夏に開花するというタカサゴユリの性質以外は、テッポウユリに近いものの方が園芸的には価値があるようなので、市場に出回っているシンテッポウユリは草姿や花の様子がテッポウユリに近いのではないかと思います。しかし、シンテッポウユリは自家交配が可能だということなので、庭で栽培したり、放置されたりしているうちに、タカサゴユリに近い草姿や花のものも出てくると思います。一方、タカサゴユリの切花としての栽培は、シンテッポウユリが普及する(1970年代頃?)につれて廃れたといえます。

さて、それでは現在、野生化しているものがタカサゴユリそのものなのか、シンテッポウユリなのかは、私に

もよくわかりません。私の勤めている博物館には1942年に栽培されていたタカサゴユリの標本(まだ、シンテッポウユリが普及していない頃のもので、たぶん、純粋なタカサゴユリだと思います)が何点かありますが、現在野生化しているものと比べて、少し葉が細いかなという程度で、明らかな違いは見出せません。また、ユリの育種家で知られる清水基夫氏の残された標本にシンテッポウユリのいくつかの品種の標本がありましたが、多くは葉がやや幅広いものです。しかし、中には「伊那新テッポウユリ」という、現在野生化しているものとほとんど同じ位の葉の幅のものもありました。もはや日本ではタカサゴユリとシンテッポウユリ起源のものとは簡単には区別ができないかもしれません。

神奈川では1980年頃からタカサゴユリまたはシンテッポウユリが増え始めています。1979年に採集された標本に、大井埠頭に100株以上が群生などの記述がありました。現在はその頃よりも明らかに増加しています。花がきれいなので、草刈では目こぼしされること、場合によっては大事にされるため、どんどん増えているようです。

勝山輝男(2005. 8月29日)

[naturplant:2436] Re:シンテッポウユリ

石川県の本多郁夫です。

皆様のご意見をお聞きして、タカサゴユリとシンテッポウユリとは益々区別が難しいものであると認識しまし



▲タカサゴユリ(シンテッポウユリ)。左は花被片外側が紫褐色のもの、右は白色のもの

た。おそらく、染色体の比較、あるいはDNAの検討をしなくてはならないのでしょう。そうすると私のようなアマチュアには手の届かない世界となってしまいます。

しかし、園芸の世界での「シンテッポウユリ」はタカサゴユリと似ているよりは、テッポウユリと非常によく似ています。シンタカサゴユリといわずに、シンテッポウユリといったことから願えます。

テッポウユリとタカサゴユリとの雑種にさらに戻し交配や、自家受精などを通して、多数の園芸品種が作出され、園芸品種の「シンテッポウユリ」は、単純な「テッポウユリとタカサゴユリとの雑種」ではすまされないものとなっていることが良く分かりました。

金沢市農業センターで、ここで作出し品種登録された「21金沢白」というシンテッポウユリを見せて頂きました。テッポウユリとよく似ていました。農場では、そのシンテッポウユリを自家受精させたものを栽培している畑もありました。いろんな変わり者がでていました。中にはタカサゴユリに似た葉の細いものもありました。種子から育てると、形質が安定しないので、もっぱら、「鱗片」培養で育てているということでした。

本多郁夫(2005. 8月29日)

[naturplant:2437] Re:シンテッポウユリ

帰化MLのシンテッポウユリ的话题を読んでいて、はたと気付いたことがあります。花屋さんが墓参用などに束にした切花の中に、白い百合がよくあります。あの百合を今までテッポウユリと思い込んでいましたが…。

限りなくテッポウユリに似て葉の巾の広いシンテッポウユリもあることが分かりました。花束の中の百合はきっとシンテッポウユリであろうと思うに至りました。帰化植物として増えてきて身近に見るシンテッポウユリはみな葉の細いものですが…。

ところで以前に小出可能さんが書いていらしたし、千葉県植物誌のシンテッポウユリについてのp.687にも記述のある『墓地の切り花が結実して広がったという説がある』この＜説＞とは、どこに発表されているものなののでしょうか？

歌川道子(2005. 8月29日)

[naturplant:2438] タカサゴユリ(シンテッポウユリ)について
鎌倉の宮本です。

タカサゴユリ(シンテッポウユリ)について、みなさんから寄せられた各地の分布状況をうかがい、私が持っていた印象よりもその実態はさまざまであるように感じています。

わたしが植物の写真撮影をはじめた15年ほど前、当時、わたしが住んでいた小平市(東京都多摩地方東部)ではすでに、公園や空き地にタカサゴユリがけっこうありました。当時撮影した写真を見ると、このあたりのものの花被片は、紫色を帯びたものばかりでした。

現在住んでいる鎌倉市周辺でもタカサゴユリは普通にあり、たとえば東海道線の線路の敷地内の草地では群生も見られ、これらの花被片は、いずれも紫色を帯びてい

ます。

この話題のこともあって、先週末はタカサゴユリに気をつけていたのですが、たまたまかけた舞岡公園(横浜市戸塚区)で咲いていたものは、花被片が真っ白なものばかりでした。

宮本 亮(2005. 8月30日)

[naturplant:2439] タカサゴユリ

東京の羽田です。

タカサゴユリについて、北のほうの話題が少なかったので、小さな話題をつけくわえさせていただきます。

5, 6年前になりますが、福島県いわき市に当時あった実家の庭に、同じ町内の方が「きれいなユリ」を植えて帰られました。翌年には庭中あちこちから出て開花し、2, 3年後にはお隣の庭にも。紫色を帯びたほうのタカサゴユリでした。

羽田節子(2005. 8月30日)

[naturplant:2440] Re:タカサゴユリ

茨城県北部の日立市に住んでおります。

いわき市は近いので、水石山や赤井岳には良く出かけます。こちら日立市でも数年前からあちこちにタカサゴユリが増えてきており今の時期どこに行っても見かけます。シンテッポウユリなどは知らずみなタカサゴユリと思っておりましたが、昨日、観察した所、花被外面に「紫褐色」のぼかしのあるもの、無いものどちらもありました。素人では同定は難しそうなので、どう呼んだらよいか戸惑っております。

後藤伸介(2005. 8月30日)

[naturplant:2441] Re:シンテッポウユリ

鎌倉の宮本です。

本多さんのNo.2436のメールを拝見し、シンテッポウユリの増殖方法の記述がヒントになって思ったことがあります。

シンテッポウユリは種間雑種で、各形質の特性(花色であれば白、帯紫色など、葉の形であれば被針形、線形など)にばらつきが出やすいことから、増殖は鱗片や組織培養による栄養繁殖で行われることが多いようです。新品種の育成についても、栄養繁殖を増殖方法の前提とすることにより、選抜をくり返して各形質の特性を固定し、次世代にばらつきが出ないようにするといった、種子繁殖では必要となる手順があまり考慮されていない場合もあるのではないのでしょうか。つまり極端に言えば、有望系統の交配を行って、商品価値や栽培特性に優れた個体が1つでも見つければ、あとは栄養繁殖で苗を増やせるということです。

その結果としてシンテッポウユリの園芸品種には、特性として現れていない、さまざまな遺伝子を内在するものが存在することになります。このため、自家受粉であれ他家受粉であれ、結実したシンテッポウユリから種子が散布されて逸出すると、さまざまな特性を持った個体が出現して、もともと雑草的性格の強いタカサゴユリに近い特性を持つ個体が生き残り(テッポウユリに近い個体は淘汰され)、これがくり返された結果、もとのタカ

サゴユリに近いものばかりを私たちは野外で見かけるようになったとも考えられそうです。花色は生き残るのにあまり関係ないため、目にするものの中には、白い花をつけたものもあるということかもしれません。みなさまのご意見などがえればうれしく思います。

宮本 亮(2005. 8月30日)

[naturplant:2442] Re:シンテッポウユリ

藤沢の松井です。

わたしがタカサゴユリを初めて見たのは、30年以上前で、藤沢市の造成住宅地の庭(花壇などではなく)の1本で、その翌年には隣の我が家をはじめあたり中の家の周りに広がっていました。それから数年は全然名前が分からなくていらしていたものです。その後も分布状況をチェックしていますが、近年は花被片外側の紫褐色が薄いもの～白一色のものが各地でどんどん増えているような気がしていました。

そこへ、今回のみなさまのシンテッポウユリ/タカサゴユリ情報が得られて納得しました。ネット検索によっても、名前はともかく、いろんな中間段階のものが野生化しているようです。あるいは野生化して種子繁殖することにより、雑種の両親の中間形質を持った個体が出現しているのかもしれません。

今後、タカサゴユリ類を見たら、「花被片外側の紫褐色」とともに、葉の広さ/数、草丈、葯/花粉の色(テッポウユリは黄色/タカサゴユリは赤褐色)にも注意して記録しようと思っております。 松井宏明(2005. 8月31日)

[naturplant:2443] Re:シンテッポウユリ

本多郁夫です。

金沢農業センターでお聞きしたことの中で、「シンテッポウユリ(園芸品種)の多くは、花が上を向いています。」というのがあります。

私が見ている花被の白い、あるいは赤褐色のぼかしのあるタカサゴユリは花が横またはうつむき加減です。野生のテッポウユリも花は横またはうつむき加減です。切り花の束にしたとき、うつむき加減の大きな花では束を作りにくいので、花が上を向いていた(園芸品種のシン



▲栽培のテッポウユリ

テッポウユリ)のではないかと考えますが、実際に花束をご覧になった方はいらっしゃいますでしょうか。

本多郁夫(2005. 8月31日)

[naturplant:2444] Re:シンテッポウユリ

No.2443で本多さんが「シンテッポウユリ(園芸品種)の多くは、花が上を向いています。」というのがありますが、私は上を向いて咲いているユリはスカシユリしか見た記憶がありません。

今野外にあるシンテッポウユリの類では、初めの小さい蕾の時は真上を向き、それからやや蕾が大きくなる頃はかなり下を向いていて、また反対に首を持ち上げながら横向きになって咲くように見えていました。

栽培商品のシンテッポウユリは確かに上向きに咲くみたいですね。開花しても上向きのままなのでしょうか？咲いてしまっても上向きの白い百合はあまり魅力的に感じませんが…。

以前に求めた墓参用の花の束の白い百合は蕾の状態で、やや横向き(斜め上)だったようなイメージが残っています。 歌川道子(2005. 8月31日)

[naturplant:2445] Re:シンテッポウユリ

東京都心の安田です。

都心にある実家の庭に昨年、初めて生えた一本のタカサゴユリのことです。昨年は花卉の外側に明らかに赤褐色の筋があるのを確認していましたが、今年の花には、赤褐色の筋は、花柄の近くに少し残るだけで、殆ど白色でした。

今年は、そのタカサゴユリの周りには、今はまだ高さ10cmほどの葉だけの新芽が十数株みられます。その新芽から、今後どんな花が咲くのか、興味深く見守っています。 安田シゲ子(2005. 8月31日)

[naturplant:2448] Re:シンテッポウユリ

鎌倉の宮本です。シンテッポウユリの園芸品種に、花が上向きのものが多い理由については、本多さんのおっしゃるとおりだと思います。

やや古くなりますが、先日メールでも引用した「花専科 育種と栽培 ユリ」(国重正明編著、誠文堂新光社、1993)によると、ユリ一般の育種目標については、“上向き咲きの特性はユリの重要な育種目標となっている。その理由は、上向き咲き品種は草姿が立性のため、栽植密度を高くできること、切り花包装の作業性がよいこと、鑑賞価値が高いことなど優れた点を持つことが上げられる。”とあります。また、シンテッポウユリの新品種育成の傾向として、“現在、形態的に上向き咲きが育成され、従来のやや斜め下向きや横向き咲きに対して、鑑賞上、好都合で明らかに消費トレンドに合致している。”との記述があります。また、私の個人的な印象ですが、花束やフラワーアレンジメントなどで用いられている切り花用のシンテッポウユリについては、上向きのものが多かったように感じます。 宮本 亮(2005. 8月31日)

[naturplant:2459]シンテッポウユリのすすめ

神奈川県博の木場です。「神奈川県植物誌 2001」でユリ科を執筆した一人です。この植物誌では、このごろ話題の「本土に帰化しているテッポウユリ類」を呼ぶのに、タカサゴユリではなく、シンテッポウユリという和名を使いました。このような文献は少数派ですが、今でもその方がいいのではないかと考えているので、その理由をお話したいと思います。

まずは、これまでの登場人物を整理します。自生の植物としては次の2者があります。

(1)台湾に自生するタカサゴユリ。ふつうは花被の中肋が紫を帯びる。夏咲き。細葉。

(2)南西諸島に自生するテッポウユリ。白花。春～初夏咲き。広葉。

そして、

(3)園芸植物のタカサゴユリ。日本には1924年(大正12年)以降、種子が導入され、切花用にさかんに栽培されたが、シンテッポウユリ(4)が普及するにつれて廃れた(勝山さん No.2435)らしい。

(4)園芸植物のシンテッポウユリ。テッポウユリとタカサゴユリとの雑種(1939年ころ)や、さらに戻し交配や、自家受精などを通して作られた多数の園芸品種。(「花専科 育種と栽培 ユリ」誠文堂新光社、など)

これら(3)、(4)の2者が現在「本土に帰化しているテッポウユリ類」のもとになったかもしれないですね。

(1)から(4)の実体と和名の対応関係にはまったく混乱も意見の違いもないですね。

そして、この帰化植物は、シンテッポウユリ(「神奈川県植物誌 2001」「千葉県自然誌 2003」)と呼ばれたり、タカサゴユリ(「帰化植物写真図鑑」「日本の帰化植物」その他たくさん)と呼ばれています。

この帰化植物がタカサゴユリと呼ばれるときには、2つのケースがあると思います。

ひとつは、帰化しているのは(3)の末裔であると考えている場合で、もうひとつは、帰化しているのは(4)やその遺伝的影響を受けた末裔だと考えている場合です。

もしも、(3)が野生化したものを「タカサゴユリ」と呼ぶのでしたら大賛成なのですが、人工物である(4)を(1)と同じ名前と呼ぶのには違和感を覚えます。

私は、次のようなことから、この帰化植物が(3)が野生化したものだと考えるににくいと思います。

(3)が持ち込まれたのは1924年で、この帰化植物が増えてきたのは1970年代です。近年になって増えたのは、野生化できるような系統が作られたからではないかと思っています。(3)がそのまま野生化できる性質を持っているのだったら、もっと早くに広がっていいと思います。

また、(1)は「中国植物誌」では、茎の高さが20～55cmとなっています。この帰化植物の方は、(2)のようにもっと大きいものもあります。花被片の中肋が紫を帯びる度合、葉の幅も変化が大きいと思います。このことから問題の帰化植物は純粋なタカサゴユリ(1、3)とは違うと思います。

(3)は切花として売られていたそうですが本多さんのホームページにあったように、切花からは稔性のある種子ができるとは考えにくいと思います。

帰化植物が花被片中肋の紫斑が濃いものから薄いものまで混生集団をつくるというのも、雑種由来であることを示していると思います。

それで、この帰化植物は純粋なタカサゴユリ(3)ではないと考えた方が自然だと思います。

売られているシンテッポウユリ(4)と、問題の帰化植物はまったく違って見えるという投稿もありました。タカサゴユリではないとしても、シンテッポウユリとも言い難いと思われるかもしれません。しかし、(4)は多様な品種があり、通常の野生植物の種がもつよりはるかに大きな種内変異をもっているはずで(1)に良く似たものから、(2)にそっくりな個体まで連続的にありそうだと思います。その中には自生タカサゴユリっぽい、葉が細く、花被が紫を帯びるものもあって、勝山さんが言うように、外見からは(1、3)と区別できないこともあるのでしょう。せっきゃく、シンテッポウユリという全体を含むような和名があるのだから、これを使った方が良いと思います。そうすれば、自生の植物と混乱することはありません。

さて、ふたつめのケース、雑種と知りつつタカサゴユリと呼ぶ場合です。

セイヨウタンポポの一部のものは在来タンポポの遺伝子を取り込んでいますが、それでもセイヨウタンポポと呼ばれることがあります。総苞外片がめくれれたり、単為生殖をしたり、かく乱地に生えたりと、セイヨウタンポポと肝心な点が共通だとか、強奪種であることもセイヨウタンポポの特徴だという考え方だと思います。

これと同じように問題の帰化植物が、遺伝的に(1)に近いから(こんなことがあるかどうか知りませんが)とか、共通点が多い(葉幅とか、花被片の色とか、花期とか)ことを重視すべきだからとか、あえて(1)と同じ名前にした方がよい理由があってそうするのでしたらこの帰化植物を「タカサゴユリ」と呼ぶという立場もあると思います。

こういう立場の方がいらしたら、ぜひ「タカサゴユリのすすめ」をお聞きしたいと思います。

少なくとも花被片中肋の外側が紫色をするからといって、それを「タカサゴユリ」というのはやめた方がいいと思うのですがいかがでしょう。

木場英久(2005. 9月10日)

[naturplant:2460] Re:シンテッポウユリのすすめ

名古屋の吉川です。素人の「シンテッポウユリのすすめ」への一意見です。

木場さんの

「この帰化植物が増えてきたのは1970年代です。近年になって増えたのは、野生化できるような系統が作られたからではないかと思っています」

この部分はとても賛成です。きっとそうだと思うことがいくつもありますから。ただ、その原因は単に栽培品からの逸出ではないのではないかと私には思えるん

ですが。というのは、この「タカサゴユリ」は日本以外でも各地で野生化しているようですね。個人的に疑っているのは高速道路網の整備とともに外国で採取されて吹き付けられた種子に混ざっていたのでは…という気がするのです。というのは私が最初に気づいたのは東名高速道路の法面でしたし。新しい広い道路ができるたびに周辺の法面のイネ科の雑草に混ざって白い花が殖えていった気がしています。結実能力も発芽能力も高いので一気に殖えたんでしょうし、きれいだから除草作業でも残されて安定して種子が供給されたんでしょうが。DNA分析等でタカサゴユリ由来の遺伝子とテッポウユリ由来の遺伝子配列が簡単に調べられるのならこのMLの方がたの協力を得て全国各地の個体を集めて調べれば少なくともシンテッポウユリ由来であるかどうかははっきりすると思うんですが。海外のサイトを見ても「タカサゴユリ」にもいろいろあり、葉の広いもの(テッポウユリ型ではないものの)もあったり、中国本土産ということで黄色っぽいものもあったりしてよくわかりません。種子も海外ではいろんな業者が扱って大量に販売しているようですし…。「シンテッポウユリ」でも「タカサゴユリ」でもいいんですが、「シンテッポウユリ」という名はテッポウユリのイメージが強いと思います。「タカサゴユリ」ならそれとはかなり違うものという印象ですし、ほとんどの図鑑の記載と実物の印象が合うんですが。「総包片が反り返っていればセイヨウタンポポだろう。」といえるような(実際は雑種かもしれないものでも)、一般の人がみて区別できるような明確な視点を是非専門家の方々に示していただけるとありがたいです。博物館等が対応して下さることを期待しています。

吉川洋行(2005.9月11日)

[naturplant:2461] Re:シンテッポウユリのすすめ

鎌倉の宮本です。木場さんのご専門の立場からのご意見を興味深く拝見しました。

私も、木場さんがおっしゃるように、「問題の植物」の由来については同意見で、台湾の自生種であるタカサゴユリの末裔ではなく、テッポウユリとタカサゴユリの種間雑種の末裔ではないかと感じています。

木場さんの記事を読んで私が感じたこととして、「どこまでを、その植物の名称の範囲としてとらえるのか」ということがあります。テッポウユリとタカサゴユリの種間雑種を、どちらの血をより強く引いているかにこだわらず、広くとらえるというのであれば、「問題の植物」や、一般に市場流通している園芸植物の「シンテッポウユリ」は、いずれもテッポウユリとタカサゴユリの血が入っていることから、学名では種小名の前に×マークがつき、和名では「シンテッポウユリ」という名前となることでよいかと思います。また、多少なりともテッポウユリの血が入っていると思われる「問題の植物」を、台湾の自生種であるタカサゴユリと同一の名称で呼ぶことへの違和感があるのもわかります。

園芸植物は常に人間の一定の関与を前提として成り

立っているものです。園芸植物としての「シンテッポウユリ」の場合も、タカサゴユリよりも商品価値の高い、テッポウユリに近い(さらには母種のいずれにもない)特性を目指して品種改良が行われたもので、タカサゴユリに近い特性の個体が出現してもそれは人為的に排除され、品種として出回ることはまずなく、私たちが目にするのは木場さんが整理された(1)～(4)のうち、(3)に該当するものばかりとなります。だからこそ、園芸植物としての名前も、新タカサゴユリではなく、新テッポウユリと呼ばれるようになったわけですし、実際、野外で見かける「問題の植物」と園芸植物の「シンテッポウユリ」の各形質の特性については、計測するまでもなく、一見してちがいがあるのがわかります。

以上のように、植物学上の「シンテッポウユリ」と、園芸植物の「シンテッポウユリ」ではとらえている範囲が異なり、後者のほうがより狭い概念であるということかと思います。私が以前投稿した記事で、白い花被の「問題の植物」を「シンテッポウユリ」と呼ぶことに違和感があるとしたのは、まさにこの点なのです。

もうひとつ気にかけておいたほうがよいのではないかなと思うことがあります。それは、植物の名前というのは、このMLに参加されている専門の方々や、私のような個人的な植物ずきといった、特定の範囲内の人間だけで扱われるものではなく、花きの生産者や市場関係者に使用されたり、店頭やガーデニングなどを通じて一般の目に触れたり、さらに、最近では特定外来生物法の場合のように、個別の生物名が新聞の紙面に掲載されるなどにより、一般消費者にも浸透していくものなどということです。

そういった場合、一般の人が「シンテッポウユリ」という名前を聞いた場合に受ける印象と、植物学上の「シンテッポウユリ」という名前が指すものがあまりに離れていると、一般の人たちに誤解をされるおそれがあるのではないかな、ということがあります。まったく仮定の話ですが、「問題の植物」を特定外来生物法で指定となった場合は、どの名前が適当なのでしょうかな。

「問題の植物」については、シンテッポウユリともタカサゴユリとも異なる、新称があったほうが、誤解のおそれがないのかもしれない。 宮本 亮(2005.9月11日)

[naturplant:2462] Re:シンテッポウユリのすすめ

近畿植物同好会の植村修二です。

大学時代、私は球根類の生理を調べていまして、当時シンテッポウユリのりん片繁殖の実験も手伝っていましたので、宮本さんの認識はよく理解できます。今、盛んに野生化しているものをシンテッポウユリと呼ぶには違和感がありますね。テッポウユリとの雑種起源であっても、外観、種子繁殖力、両面においてタカサゴユリの形質を強く示しております。おそらく、園芸分野の人は今野生化しているものは、何ら抵抗無くタカサゴユリとするかもしれないです。

5年ほど、外観はテッポウユリで夏咲き、花は上を向く栽培系統のシンテッポウユリ、1タイプを作っていま

す。種子もできますが、これは今のところ野生化する兆しは認められないです。

No.2460の吉川さんの意見「個人的に疑っているのは高速道路網の整備とともに外国で採取されて吹き付けられた種子に混ざっていたのでは…という気がするのです。というのは私が最初に気づいたのは東名高速道路の法面でしたし。新しい広い道路ができるたびに周辺の法面のイネ科の雑草に混ざって白い花が殖えていった気がしています。」についてですが、私はタカサゴユリの原産地からのイネ科牧草の輸入の可能性が低いこと、今、ひろがっているものがテッポウユリとの雑種起源の可能性が高いとされる点を考慮すると、外国で採取されて吹き付けられた種子に混ざっていたとは考えにくく、栽培品の逸出と考えた方が自然じゃないかと思うのです。

ササユリやヤマユリ、オニユリなど多くのユリ類の生育地を見ていると、むき出しの地面よりも、丈の低い草に覆われている林縁などに生えていることがよくあります。おそらく、タカサゴユリがのり面で大繁殖するのは、ユリの好む環境にあるからではないかと思うのです。

なお、東名の“タカサゴユリ”については、1983年、神奈川県松井田町の記録があります。

参考文献

岩田勝之助1984：東名高速道路の斜面に生えたタカサゴユリ、レポート日本の植物、23：23。

植村修二(2005.9月11日)

[naturplant:2463] Re:シンテッポウユリのすすめ
高橋です。

No.2459の木場さんの中に
「(1)台湾に自生するタカサゴユリ。ふつうは花被の中肋が紫を帯びる。夏咲き。細葉。」

とありますが、台湾に自生するタカサゴユリは、台湾の植物図鑑「台湾的野花－高海拔編」(渡假出版有限公司)には“台湾百合(高砂百合)株高50～120cm,花期4～7月”となっており、「中国植物誌」と違っています。私自身も4月に台湾の海岸近くで、高さ1m以上のタカサゴユリを見たことがあります。ちなみに台湾では、タカサゴユリを台湾百合と呼ぶことが多いようです。(1)は「中国植物誌」では“茎の高さが20～55cm”となっています。

高橋 修(2005.9月12日)

[naturplant:2464] Re:シンテッポウユリのすすめ
藤沢の松井です。

わたしは、タカサゴユリのままにしておいてほしいと思います。理由は簡単で、これまで慣れてきた、また、図鑑にも用いられている名前は、誤りでない限り、そのままにしておく方が余計なエネルギーを使わなくて済むからです。(要するに年取ってから新しく覚え直すのは大変だということです。)

学名は、分類学的な研究が進む中で変更があるのは仕方ない(素人としての言い方ですが…)と思いますが、和名には規約も強制力も無い(先取権的なマナーはあるよ

うですが…)という点を活かして、学名が変わってもその植物と対応する和名は残してほしいものです。

タカサゴユリと称した上で、現在野生しているタカサゴユリには園芸種のシンテッポウユリ(雑種起源)の遺伝子がいろんな割合で混じっているという知見が加わると、知識欲が刺激されて得をしたような気がしませんか？

わたしがタカサゴユリを初めて見たのは26,7年前、藤沢の以前の住まいの庭でした。ある年、近所中の庭に生えてきました。

タカサゴユリという名前が分かるまで数年かかりましたが、その間にあちこちで野生化しているのを見掛け、花卉の紫褐色の濃さの程度にはいろいろあることを知りました。近年では、白色に近いものが増えているなという感触を持っていたところに、今回の話題が出て、疑問が解け、すごくうれしい思いです。

ところで、ネットでいろんな写真を見ると、花卉の色だけでなく、葯の色にも変異がある－木場さん(1)のタカサゴユリに近いものは赤褐色、(2)のテッポウユリに近いものは黄色－気がしますが、いかがでしょうか？ 葯の色は花の咲き始めと終わりとで違う植物もありますが、タカサゴユリはどうなのでしょう？

松井(2005.9月12日)

[naturplant:2467] Re:シンテッポウユリのすすめ
神奈川県博の木場です。

花は枯れても、話は盛り上がっているので「問題の植物」君も喜んでいることと思います。

吉川さんのNo.2460にあるように「高速道路網の整備」など、あるときに人為が働いて帰化植物が急に増えるというのは、ありそうなことだと思います。「問題の植物」が純粋なタカサゴユリ(3)ではない根拠として、(3)が日本に持ち込まれた時期と、「問題の植物」が広まった時期がずれていることを挙げましたが、根拠のひとつが弱まりました。

吉川さんは、「問題の植物」は雑種由来ではなく、「純粋なタカサゴユリの園芸植物」(3)が逃げ出したものだとお考えなのでしょうか。

次は、宮本さんNo.2461と、植村さんNo.2462にご返事します。

宮本さんは、「問題の植物」は雑種由来だと考えつつ、「シンテッポウユリ」と呼ぶよりは「タカサゴユリ」と呼ぶのに賛成されているのですね。植村さんNo.2462も同様なお立場だと思います。

雑種のなかからタカサゴユリ的な性質の強いものばかりが選抜されて帰化していて、ごく普通に園芸的に「シンテッポウユリ」としているものとは、計測するまでもないほど違いがある。同じ「シンテッポウユリ」という名前では違和感がある。…ということですよ。

うちの博物館にはユリの研究家の清水基夫さんのコレクションがあります。清水氏はいろいろなシンテッポウユリの品種の標本を作られていて、その中には「伊那

テッポウユリ」のように、葉の細いものもあります。伊那という品種は清水氏の著書にも、シンテッポウユリの一品種として出てくるので、これが(1, 3)ではなく、「園芸的に作られた雑種に由来するもの」(4)であることは間違いがないと思います。

標本の葉の幅を計測してみましたら、広いもの(BS鉄砲)は23mmもあり、「問題の植物」とは違ってみえましたが、狭いもの(伊那)は4mmしかありませんでした。ちなみに神奈川県産の「問題の植物」の中には広いものでは7mmぐらいのものまでありました。

また、このシンテッポウユリの標本の中には、花被が紫を帯びるものもありました。

つまり、園芸の世界のシンテッポウユリには、現在は広葉のものが多いのですが、本来はいろいろなものがあり、園芸植物の「シンテッポウユリ」は帰化している「シンテッポウユリ」よりむしろ範囲が広いのではないのでしょうか。

No.2461の宮本さんの「木場さんのご専門の立場からのご意見を興味深く拝見しました。」

にご返事します。

専門だなんて…シロウトですよ。神奈川県植物誌ではユリ科も書きましたが、私の専門はイネ科のつもりです。また、野外で(1)や(2)は見たこともありません。私は本や標本や身近な「問題の植物」を見て考えたことを書いていただけなんです。みなさんのご意見を聞けてとても勉強になりますので、今後もよろしくお願いします。

また、高橋修さんのNo.2463にご返事します。「台湾に自生するタカサゴユリについてですが、台湾の植物図鑑「台湾の野花－高海拔編」(渡假出版有限公司)には“台湾百合(高砂百合)株高50～120cm、花期4～7月”となっており、「中国植物誌」と違っています。私自身も4月に台湾の海岸近くで、高さ1m以上のタカサゴユリを見たことがあります。」

この文献をみたことはありませんでした。でも、自生のタカサゴユリ(1)は写真でしか見たことがないのですが、50cmより小さい状態で開花しているように見えるものもありました。「台湾的・・・」でいっている植物は本当の(1)なのでしょう。花期もやや早いように思いますが。

「中国植物誌」をみると台湾にもテッポウユリ(2)があ

ることになっています。

ちなみに台湾では、タカサゴユリを台湾百合と呼ぶことが多いようです。

「中国植物誌」でも漢名は台湾百合になっていました。実体と漢名の間にも混乱はないようですね。

問題は「問題の植物」を雑種由来とみるかどうかと、それを何と呼んだら問題が少ないかの2点ですよね。

木場英久(2005. 9月13日)

[naturplant:2468] Re:シンテッポウユリのすすめ

神奈川県博の木場です。

松井さんは問題の植物は雑種だと思いつつ、慣れ親しんだ名前で呼びたいので「タカサゴユリ」がよりよいのではないかというご意見ですね。

私も学名だけでなく和名も変更は必要最小限に留めるべきだと思います。松井さんの言われるとおりに「誤りでない限り、そのままにしておく方が余計なエネルギーを使わなくて済む」と思います。みなさんも同意見だと思います。

今回の場合、台湾に自生する植物(1)を「タカサゴユリ」と呼んでいるわけです。もしも、「問題の植物」を雑種由来であると考えるのでしたら、(1)と由来の異なるものを同じ名前と呼ぶのは誤りであり、混乱の原因ではないのでしょうか。

たとえば、宮本さんのNo.2438を例にさせていただくと、「わたしが植物の写真撮影をはじめた15年ほど前、当時、わたしが住んでいた小平市(東京都多摩地方東部)ではすでに、公園や空き地にタカサゴユリがけっこうありました。当時撮影した写真を見ると、このあたりのものの花被片は、紫色を帯びたものばかりでした。」というのを読んで、切花として売られていたタカサゴユリ(3)と「問題の植物」を同じ「タカサゴユリ」で呼んでしまうと、これは純粋なタカサゴユリが帰化していた記録が写真に残されているということなのか、いま問題になっている植物のことをいっているのかわかりにくくなってしまいます。正直な話、私はシンテッポウユリで慣れ親しんでいたもので、理解するのに読み直してしまいました。

慣れ親しんだ名前でも、いずれ違う名前と呼ぶことになるのだったら、すこしでも早く変更した方が混乱は少なくて済むと思います。

木場英久(2005. 9月13日)

皆さん、このメールのやりとりをどう感じましたか？ 現在全国各地で見られる「問題のユリ」を皆さんはタカサゴユリ、シンテッポウユリ、どちらの名前で呼んでいますか？

メールのNo.2435で勝山様が「現在、少なくとも南関東～東海地方で野生化している問題の植物をシンテッポウユリとタカサゴユリに区別することはできません。同じ一連のものと思っています」と書かれていますが、私たちはこの同じものを「神奈川県植物誌 2001」と「千葉県の自然誌 2003」では和名をシンテッポウユリとしており、「日本帰化植物写真図鑑」(全農教)、「日本の帰化植物」(平凡社)その他ではタカサゴユリとしております。同じものに別々の和名が使われているので、事情を知らないと別の植物だと理解され混乱を生じます。全農教では今後、タカサゴユリ(別名シンテッポウユリ)またはシンテッポウユリ(別名タカサゴユリ)と併記しようかと検討中です。

このメールのやりとりについて、皆さんからのご意見を募集します。どうしても良いと思われるか、ご意見を「帰化植物友の会 事務局」宛にお送り下さい。集まりましたご意見は次号でまとめて掲載したいと思いますので、多数の投稿をお待ちしております。

なお、メールでは9月13日以降もいろいろな議論がされていますので、これも次号でまとめる予定です。

野外観察ハンドブック

校庭のくだもの

鈴木邦彦・岩瀬徹／著 定価：2,000円（本体1,905円＋税）（シリーズ共通）

「野外観察ハンドブック」校庭シリーズの10巻目は、くだものを取り上げました。これまで、本シリーズは……

- ① 雑草、② 樹木、③ 作物、④ 花、⑤ 野鳥、⑥ 昆虫、⑦ クモ・ダニ・アブラムシ、⑧ コケ、⑨ 生き物ウォッチング

……と展開してきましたが、どの巻でも書名の「校庭」にふれてきました。

「校庭」とは、学校の敷地内だけをいうのではなく、学校の周辺、空き地や公園、土手や道ばたなど、身近で観察のフィールドになる場所を広くそう呼んでいる——いずれの前書きにもそう書かれています。

「学校で使う本みたいだから、自分にはあまり関係がない。」…そういうふうと思っていた方は、ちょっと頭を切り替えていただく必要があるかもしれません。要するに、この校庭シリーズは身近な自然観察をテーマとし、ナチュラリストなら誰でもいつでも目にしているようなフィールド全般を扱っているのです。

このところをふまえていけば、「校庭にくだものなんてあるの?」という疑問には、あまり意味がないこともおわかりいただけるでしょう。シリーズのどの巻もそうであるように、本書でもまず、果物を植物の一種ととらえ、そこから特有の「くらし」と「かたち」を見てゆきます。これは校庭シリーズに一貫して流れている態度で、これこそがシリーズを「ただの図鑑」でない、知的好奇心を刺激してくれる、発見に満ちたものになっています。

校庭のくだものでは、第1部「くだもののくらしとかたち」として *果樹の1年、*くだものとは何だろう、*花から果実、種子へ、*くだものづくり-食べるのはどこか-、*花芽のつき方、*品種と品種改良 がとりあげ

られ、なるほど植物学的見地から果物にスポットを当てるとこういうことになるのか、と非常に興味深く、しかもそれがわかりやすく解説されています。

第2部は、いわゆる図鑑の部分です。ここではミカンやリンゴ、ブドウなどの一般果樹からトロピカルフルーツ、ベリー類まで120種が掲載され、なかには海外から導入されたくだものなど、話では聞いていてもまだ見たこともない種類なんかも数多く含まれていて十分楽しめます。

第3部では、「くだもの」の栽培について書かれています。これまでプロの果樹農家向けにしか発信されていなかった内容ですが、わかりやすくコンパクトにまとめられ、専門家でなくても理解できます。

くどいようですが、タイトルに「校庭」と付いているからといって、対象を学校という領域に限定するのは意味がないうえ、あまりにもったいないことで、広くナチュラリストの方々の観察のお供にされることをお勧めします。目のウロコの1枚か2枚が落ちる体験をされること、うけあいです。



「校庭のくだもの」に掲載してあるくだものの種類

バナナ	グミ	ブタン	ウメ	チェリモヤ
モンステラ	カカオ	グレープフルーツ	オウトウ	ボポー
ココヤシ	クッパスー	スイートオレンジ	セイヨウスモモ	ピタヤ
パイナップル	ドリアン	ユズ	ニホンスモモ	マカダミアナッツ
ハスカップ	カイエンナッツ	ウンシュウミカン	モモ	クワ
タマリロ	ブドウ	キシウミカン	ネクタリン	バンノキ
ヤエヤマアオキ	ナツメ	ボンカン	バントウ	イチジク
カリッサ	インドナツメ	ナツダイダイ	アーモンド	パラミツ
オリブ	ケンボナシ	サンボウカン	セイヨウラスベリー	ニホングリ
カキ	トチノキ	ハッサク	ブラックベリー	チュウゴクグリ
サボジラ	リュウガン	イヨカン	ピワ	ヨーロツバグリ
カニステル	ランブータン	タンゴール類	マルメロ	シイノキ
ミラクルフルーツ	レイシ	シキキツ	カリン	ヘーゼルナッツ
ブルーベリー	カシューナッツ	キンカン	セイヨウスグリ	ツノハシバミ
クランベリー	ピスタチオ	ゴレンシ	フサスグリ	ペルシャグلمي
モモタマナ	マンゴー	ビリンビ	マンゴスチン	オニグルミ
ブラジルナッツ	アセロラ	タマリンド	キウイフルーツ	ペカン
ザクロ	ランサ	ニホンナシ	サルナシ	ヤマモモ
グアバ	ホワイトサボテ	チュウゴクナシ	アケビ	カヤ
レンブ	ライム	セイヨウナシ	ムベ	チョウセンゴヨウ
フェイジョア	シトロ	リンゴ	パーベリー	イチヨウ
ジャボチカバ	レモン	ジュンベリー	アボカド	
ババイヤ	ブシュカン	サンザシ	バンレイシ	
パッションフルーツ	ダイダイ	アンズ	トゲバンレイシ	

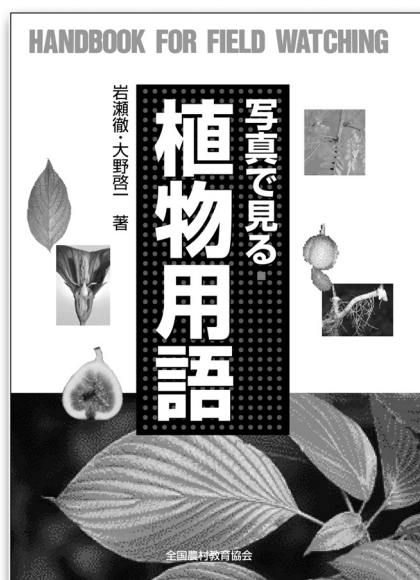
「野外観察ハンドブック」の
新しい仲間！

写真で見る植物用語

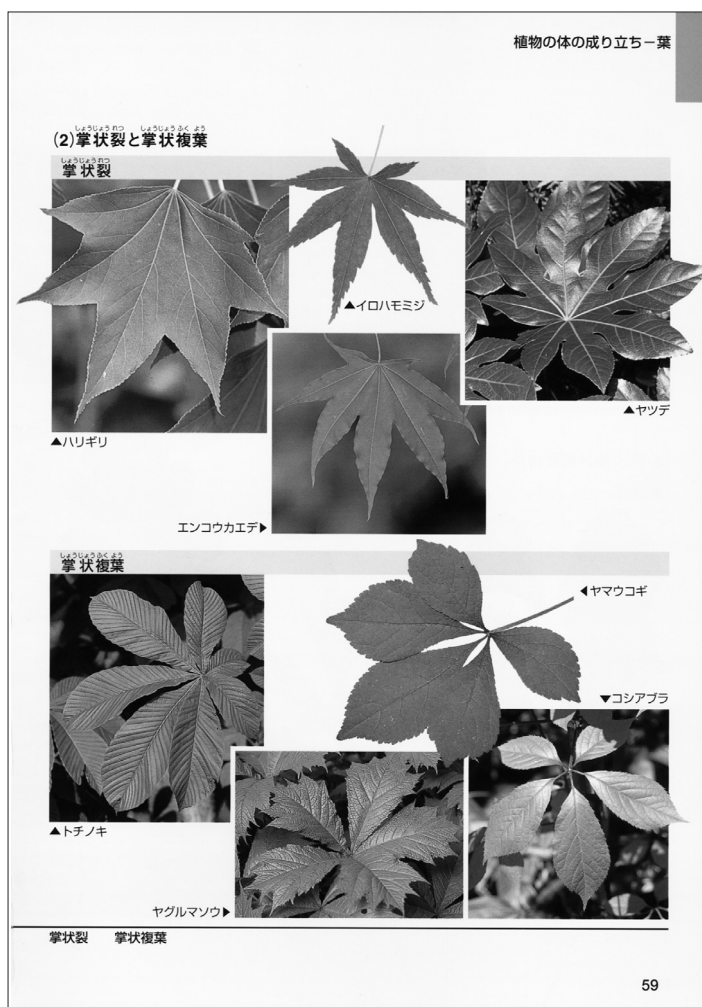
岩瀬徹・大野啓一／著

植物用語を理解することで、植物のどこを、どう見ればいいのか、という「見方のポイント」がよくなり、植物観察がもっと楽しく、もっと深くなります。

- 1章 植物の体の成り立ち
- 2章 花と種子
- 3章 環境と生活
- 4章 植生とその分布



定価：2,310円（本体2,200円＋税）



定価：1,470円（本体1,400円＋税）

昆虫観察 Q&A

チョウの羽はなぜ美しい？

群馬県桐生市に8月にオープンした県立「ぐんま昆虫の森」が連日のにぎわいを見せています。この初代園長として活躍されているのが、本書の著者矢島穂先生です。矢島先生は長年ラジオ「こども科学電話相談」の回答者をされてきましたが、本書でも質問に答える形で、昆虫に関するいろんな不思議を解説しています。

チョウとガの違いは？ カマキリのメスはオスを食べるの？ オンブバッタはなぜオンブする？ 虫の声はなぜ耳に心地よいの？ 昆虫も眠るの？ バッタとイナゴは同じか？ チョウの羽はなぜ美しい？

昔、昆虫少年だったお父さんやお母さんにもぜひ手にしてほしい1冊です。

出版：全国農村教育協会

TEL 03-3839-9160(出版部) FAX 03-3839-9172(出版部)

hon@zennokyo.co.jp

「浅野貞夫 日本植物生態図鑑」を全農教帰化植物友の会会員に特別販売

同封内容見本の「浅野貞夫 日本植物生態図鑑」の発行を記念し、全農教 帰化植物友の会会員に特別販売いたします。【送料無料】

この申込用紙に所定の事項をご記入の上、FAX等で直接お申し込みください。

(2005年12月10日締切)

※この申込用紙は書店では使えませんので、ご注意ください。

書 名	税込価格	特別販売価格	申込冊数	金 額
浅野貞夫 日本植物生態図鑑	13,650円	12,000円 (税込)		
お 名 前				
〒 ご 住 所				
電話番号		E-mail		
全国農村教育協会 TEL 03-3839-9160 FAX 03-3839-9172 (営業直通)				

■ 事務局日より

●友の会通信の発行が遅れて申し訳ありませんでした。No.4の発行が2004年の7月12日ですから丸1年以上あけてしまいました。通信を心待ちにしておられた方も多いと思いますが、期待を裏切ってしまう恐縮しております。

今回は「タカサゴユリカシンテッポウユリカ」のメール論争を特集したところ16頁の大作になり読みがいのある通信になりました。

●「日本帰化植物写真図鑑」発行から4年を経過しました。この4年間にも新しい帰化植物の報告が多く寄せられております。

全農教では「日本帰化植物写真図鑑」に掲載しなかった帰化植物とその後新しく報告された帰化植物を中心として、さらに「日本帰化植物写真図鑑」に掲載されたものでも、その後の研究の結果変更になったもの、在来種や外来種同士でも似ていて区別が難しいものなどをより分かり易く解説したコラムなどを多く入れた「日本帰化植物写真図鑑 その2」を現在企画し、編集を進めております。

つきましては、「日本帰化植物写真図鑑」に未掲載の帰化植物の写真をお持ちの方は写真を提供していただきたいと思えます(写真はスライド、紙焼き、デジタル画像など)。ご提供いただいた写真は「その2」に使わせていただきます(ご提供いただいた写真で採用したものについては全農教規定による使用料をお支払いいたします)。お待ちしております。事務局までご連絡ください。

皆様からの多数のご提供をお待ちしております。

●友の会会員の特典について

日本帰化植物友の会の会員の方には、全国農村教育協会発行の図書については、本体価格の1割引でお送りいたします。全国農村教育協会の図書でご希望のものがございましたら、FAXまたは郵送で注文してください。この場合必ず会員番号を記入してください(会員番号は宛名シールの下に記入してあります)。

※なお、この特典は書店を通じての注文には適用されませんので、必ず直接申し込んでください。

(送料はかかりません。代金は請求書・振替用紙を同封しますから、現品到着後にお支払いください)。

2005年の新刊は10～11頁で紹介した「校庭のくだもの」「チョウの羽はなぜ美しい?」。また「写真で見る植物用語」は昨年の発行ですが、分かり易いと評判がいいので改めて紹介しました。同封した内容見本の「牧草・毒草・雑草図鑑」は毒草の項が好評で、モロヘイヤ・ワラビ・コンフリー・タマネギなどが毒草の項に入っております。何故?は見てのお楽しみ。

全農教・日本帰化植物友の会事務局

〒110-0016 東京都台東区台東 1-26-6

(植調会館) 全国農村教育協会内

TEL 03-3833-1821 FAX 03-3833-1665

http://www.zennokyo.co.jp

e-mail:kika@zennokyo.co.jp